

メッセージ  
坂上貴之（慶應義塾大学名誉教授）

今年も多様な研究がなされたことが良くわかるプログラムと発表要旨でした。論理と感性のグローバル研究センターは2012年にスタートし、本格的な始動は2014年、すでにかれこれ8年余りも経過してきました。このセンターは同センターのウェブページの沿革にもあるように、2002年の21世紀COEからの研究活動を連綿とつないでいると見ることもできます。すると18年間も文学部内、あるいは文学・社会学研究科内での共同研究の芽を育ててきたことになります。確かに、私もまた、いまだに21世紀COEで始めたテーマをその頃からの仲間とほぼそそ続けており、その一部は三田哲学会の叢書としてまとめさせていただきました。継続は力なり、は義塾にとって特別の意味のある標語ですが、このセンターは、まさしくその継続を支えてきた重要な機関であると言えましょう。

そのセンターを長く支えてこられた、言い換えれば私たちの継続した共同研究を支えてくださった岡田光弘さんが今年定年となります。それにあたり、私はここで、岡田さんへの深い感謝の念をお伝えしたいと存じます。長きに亘り、センター取りまとめの労を取ってくださり、誠にありがとうございました。